

らいぶ 創 REATOR

NO.65
2013年5月
研究広報誌

学びをデザインする子どもたち

～つなぐ・つむぐ・つくる～

CONTENTS

- 発刊にあたって「学びをデザインする子どもたち」によせて・・・・・・・・・・ 1
- 本校の研究について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2・3
- 教科部紹介・スタッフ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4・5・6・7
- 共同研究開発校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8

「学びをデザインする子どもたち」によせて

和歌山大学教育学部附属小学校長 船越 勝



校庭の桜が舞い散るなか、今年も新一年生が入学してきました。入学式での一年生たちの表情を見ていますと、最初は慣れない場所で、多少不安な表情を示していた子どもたちも、在校生のお兄さん、お姉さんの歓迎の挨拶や楽しい歌などを聴いているうちに、「学校大好き!!」「早く友だちと遊びたい!!」「いろんなことを学びたい!!」という、ワクワクした表情に変わっていくのが本当によくわかります。

このように、子どもたちは、元々、学校や学びが大好きで、いろんなモノ・コト・人に興味・関心を持ち、いつも「学びたがっている存在」だと思えるのです。近年の国際的な学力調査で、日本の子どもたちの勉強嫌いのデータと「学びからの逃走」の傾向が、彼ら／彼女らの不安と希望喪失への警鐘として指摘されています。私は、こうした「学びたがり屋」の子どもたちの本性を、まっすぐにスクスクと伸ばしてやっていきたいですし、それこそが学校という制度の存在意義であり、ミッション（任務）なのではないかと考えますが、いかがでしょうか。

そうした意味で、学校は本来、「学びの学校」であるべきだし、なるべきなのだろうと思います。学校をめぐる社会状況の変化の中で、学校に要請される期待や課題は、児童指導や躰、あるいは情報活用能力など多岐にわたりますが、「学び」こそが中核（コア）におかれる必要があるのです。また、この間の学校の制度疲労などの批判に対しては、「学びを通じた学校改革」という自明の事実を私たち教師が改めて意識化し、それを地道に、しかし、着実に進めていって初めて、学校改革のメイン・ストリームたり得るのです。

私は今年度最初の職員会議で、学校運営方針として、「子どもに希望を育む教育」ということを述べましたが、このような学びと学校の改革と創造の中で、子どもたちは「早く明日が来ないかな!!」「授業の続きが楽しみ!!」と自らの学びに「希望」を見い出すことができるのです。さらにいえば、自分の未来と自己自身についての「希望」も発見していくのです。いま、子どもたちの学びを「希望」に紡いでいくことが求められています。

附属小学校では、今年度、「学びをデザインする子どもたち～つなぐ・つむぐ・つくる～」を研究テーマに、こうした「学びたがり屋」の子どもたちが、自らの興味・関心と課題意識に導かれて、世界や他者とつながりながら、自分たちの力で学びを追究・創造していく実践のあり様を検討していきたいと思っています。

いま、総じて学校に必要なのは、子どもには「学ぶ喜びと希望」、教師には「教える自信」、保護者の皆様とは「信頼とつながり」ではないでしょうか。附属小学校では、6月には複式授業研究会、7月には夏季教科領域別研修会、11月には教育研究発表会、そして、3学期には、ICT活用授業研究会も予定して、これらに取り組んでいきます。どうか多くの皆様方の積極的な参加をお願い申し上げます。

本校の研究について

★本年度の研究テーマ

学びをデザインする子どもたち

～つなぐ・つむぐ・つくる～



研究主任
梶本 久子



昨年度新しく提案した「学びをデザインする子どもたち」は、子どもたちが主体となって課題解決を行う姿をめざしました。

そして、研究に携わっていただいた秋田喜代美先生（東京大学大学院）からは、その成果として「聴き合い学び合う関係として、様々な視点や価値を出し合うことで、一つのものに集まってつくっていくような授業が観られた」「学びの筋道をふり返ることができるような環境を教室に作っている」の2点を挙げていただきました。さらに「学ぶとは頭に詰め込むことではなく、心に灯をともしることである」（アイルランドの詩人イェーツの言葉）を引用され、「本校では灯をつけるだけではなく、灯をともし続け、その支えはどうあればい

いのかを探究しているのではないか」という講評をいただきました。また、校内研究授業などを参観し、指導していただいた二宮衆一先生（和歌山大学）には「学びをデザインするという点について、十分共通理解できていないのではないか」「聴き合い、学び合う学級風土の具体的な姿を示すことが必要である」「協議会の持ち方を変えることで、研究が深まり、積み上がっていくのではないか」というご指摘もいただきました。

上述の先生方からのご意見をもとに、私たち教師は子どもたちの心に灯をともし続けるために、みとりと支援をしっかりと行い、研究協議の持ち方についても工夫することで、学びをデザインする子どもたちを育てることができると考えました。

学びをデザインする子どもたちの姿をめざすためには、教師がどのようにみとりと支援を行うかが重要です。目の前の子どもを注視し、子どもの考えに寄り添いながら、働きかけをし、授業にいかしていきます。その繰り返しの中で学びをデザインする子どもが育っていきます。そこで、今年度は「つなぐ・つむぐ・つくる」をサブテーマに、みとりと支援を充実させることで、研究主題に迫っていきます。

実際に研究を進めるにあたり、

- ① 聴き合い、学び合う「学級風土」づくり
- ② 子どものみとりと支援
- ③ 授業記録の活用

の3つをポイントとして取り組んでいきます。

① 聴き合い、学び合う「学級風土」づくりでは、学級の子どもたち同士が受容的な関係となるように、各クラスで工夫をしていきます。どのような工夫をしているのか、その方法を共有化することで学校全体として落ち着いた雰囲気となり、子どもたちが聴き合い、学び合う姿をめざします。

② 子どものみとりと支援では、子どもたちがどのような思いや願い・考えをもち、友だちのどの発言にゆさぶられているのか、どのような変化を遂げていったのかという学びの変容をしっかりとみとり、一人一人の子どもの学びとどう向き合っていくのかを探ります。

③ 授業記録の活用では、授業記録をとり、それをもとに分析を行います。その時には、着目見やその他の子どもの発言、教師の発問を追うことによって「学びをデザインできた」場面を探り、どのようにして「学びをデザインしたのか」、その前後の学級全体の様相を分析していきます。

これら3つのポイントについては、さらなる提案をしていきたいと思っております。

今年度予定している研修会・研究会の案内を次頁に掲載させていただきます。ぜひ和歌山大学教育学部附属小学校へ足をお運びください。



研修会ならびに研究会のご案内

夏季教科・領域別研修会

7月25日(木)			
午前の部(9:30~12:00)		午後の部(13:30~16:00)	
社会 複式	理科 音楽	社会 体育	理科 家庭
7月26日(木)			
国語 生活	算数	国語 図工	算数 食育

※夏季研修会での研修内容、お申し込みは、次号にて詳細お伝えします。
また、本校ホームページでも随時情報を提供していきます。

平成25年度教育研究発表会

◆2013年11月2日(土)

単式学級・複式学級あわせて全22授業を公開致します。

講演・対談 秋田喜代美先生(東京大学大学院教授)



第7回 ICT活用授業研究会

昨年は、web 申し込みにて先着100名限定という形で行いました。当日はたくさんお方にご参会いただきました。本年度も、「ICT活用授業研究会」として、2014年1月31日(金)に開催させていただく予定です。

両研究会とも、詳細は、後日、本校ホームページにてご案内いたします。

教科部★紹介

国語科部

「学び合い」を支える言語活動の充実 ～「思考力」「判断力」「表現力」を育む三つの対話～

言語活動の充実が実践課題となっています。国語科部では、三つの対話、つまり、対象、他者、自己との豊かな対話により、子どもたちの「思考力」「判断力」「表現力」を育てていきたいと考えています。そのためには、子どもたちの学びをつなぎながら、クラスみんなが安心して学べるクラス、夢中になって学べる授業づくりが大切です。教材と子ども、子ども同士、知識と知識をつなぎ、つむいでいくことのできる充実した言語活動を取り入れた授業づくりを研究していきます。



北川勝則 宮脇 隼
湯浅明菜 小杉栄樹

社会科部

一人一人の学びの充実をめざして ～ひとり学習を全体学習の場面へ～

社会科では、全体学習の中で友だちの考えを聞き、自分の考えや思いを出し合う中で、子どもたちが学びをデザインし、焦点化していく授業をめざしています。より深まる学びにつなげるためには、ひとり学習の充実を大切にしたいと考えています。昨今、社会的事象は複雑化し、「ひと・もの・こと」に関する価値観も大きく変化しています。社会の問題を自分にかかわりのあるものとして受け止め、一人ひとりがこだわりをもって追究していく学習をすすめていくことが大切です。

今年度も、子どもたちの対話によって個の「問い」「こだわり」を追求し深めていくことを大切にしていきたいと思います。よろしくお願いします。



梶本久子 矢出大介

算数科部

子どもの思考が創る算数授業 ～互いの考えを豊かに表現し合いながら～

算数科では、算数的活動を取り入れた学習を通して、「子どもたちの思考が創る算数授業」をめざして取り組みます。自分の考えの根拠を明らかにしながら、子どもたちは互いの思考を表現し合い、課題解決に向かいます。その道筋を「子どもたちによる学びのデザイン」と捉え、具体物の操作・言葉・数・式・図などを用いて表現できる子どもを育てていきます。

また、子ども一人一人が自分なりの思考が持てるように、算数的活動を重視した教材の工夫、課題提示の工夫、互いのコミュニケーション力を高める工夫の「3つの工夫」に重点を置きながら研究を進めていきます。

夏季教科領域別研修会・教育研究発表会などで、日頃の実践を交流できればと思います。よろしくお願いします。



(左) 土岐哲也 北端一喜 吉久寛郎
小谷祐二郎 市川哲哉 (右)

教科部★紹介

理科 科学的な見方・考え方を育て、 自然事象の本質をさぐる理科の学び

子どもたちは、これまでに知っていたことでうまく説明できないものに出合ったとき、疑問や問題をもつこととなります。その「ふしぎだなあ」とか「どうして?」と思うことは、「わかりたい」「わかった」「なるほど」につながる大切な気持ちです。

今年度理科部では、原点に戻り理科の「楽しさ」や「感動」を大切に実践をしていきたいと考えています。ものとのふれあい、つまり対象との出会いで興味関心を高め、自ら探求することが楽しくなるような理科をめざします。その中で、理由や根拠を他者と共有することで学びを深め、対象に対する自分の見方・考え方をより科学的な見方・考え方へと変容させていこうと考えています。

7月の夏季教科等別研修会や10月の教育研究発表会にご参会ください。



亀岡正志 西村文成 馬場敦義
田村和弘 中西大

生活科 自立をめざして ～子どもたち一人ひとりが主体的に活動・体験できる生活科～

生活科の目標は「具体的な活動や体験を通して ～ 自立への基礎を養う」ことです。この活動や体験で出会うすべての“もの・こと・ひと”に、子どもたちが主体的にかかわってほしいと考えています。そのために子どもたち一人ひとりの「思い・願い」を大切に、学校生活で自然と出た“つぶやき・気付き”を活かした授業づくりを目指します。

今年度も、生活科と各教科・領域との合科カリキュラムを構築し、合科学習のあり方を考え、実践していきます。



神山求实 中西正子

音楽科 「比べる」でせまる音楽の魅力 ～思いや意図をもって表現できる子どもに～

音楽科部では、子どもたちが質の高い音楽的な力を身に付けていくために「比べる」を大切に、表現及び鑑賞の子どもたちがいきいきする活動を通して、音楽の魅力にせまっていきます。

思いや意図をもって表現できる子どもに育てるために、

- ② 現と鑑賞の活動において「比べる」学習の筋道を明らかにします。
- ② 集中して聴く活動から、言葉などで感じ取ったことを表現できるようにします。
- ③ 課題を焦点化することで、対象をより深く理解できるようにします。



内垣美香 江田 司 居澤結美

教科部★紹介

図画工作部 **かいて楽しい 作って楽しい 見て楽しい 感じて楽しい 図画工作**

手指を使った活動から体全体を使ったダイナミックな活動までを取り入れ、多様な素材、題材体験をうながします。今まで触れたことのない素材にも積極的にかかわらせ、多くを「感じ」ましょう。

また、誰かに「伝える」ために「見え方」「見せ方」を工夫した作品作りにも挑戦させたいと考えています。

自分の「感じ方」を大切にするとともに、自分の表現に生かすことのできる鑑賞のあり方も考えていきたいです。



浅野万理菜 上田恵

家庭科部 **生活力を育む家庭科学習 —自分をCHANGE!生活をCHANGE! する子どもの姿をめざして—**

家庭科学習では、子どもたちの生活的な自立をめざし、より健康的で快適な生活を創ろうとする力（生活力）を、育ていきたいと考えます。そのために、子どもが自分自身を見つめなおす機会をもち、「自分にできること」「自分でやれそうなこと」にチャレンジしていく、日々の実践も大切にしていきます。

また、“ほんまもん”とのふれあい、科学的なものの見方、等を授業に取り入れながら、「こうなりたい!」という子どもの願いとよりそった、実感をともなう学びを積み重ねていきます。家庭生活を大切にしようとする気持ちを育みながら、自分をよりよくCHANGEしようとする、実生活をステキにCHANGEしていこうとする、そんな子どもの姿をめざします。



藤原ゆうこ 武友多佳子

体育科（学校保健）

運動がもつ楽しさを追求する学び ～ 3つの対話で「楽しさ」を広げよう ～

体育科

生涯にわたって運動を楽しむためには、運動を楽しむ力が必要であり、その楽しむ力は学校教育で培われるものだと考えます。そこで、対象との対話（動きや場の工夫など）、自己との対話（できた実感など）、他者との対話（ルールづくりや教え合いなど）を授業の中で意識させ、運動がもつ楽しさを広げる学びを進めていきたいと思ひます。

学校保健

小学校生活の6年間で、生涯にわたって健康な生活を送るための素地づくりをすることが大切だと考えています。その中で、子ども一人一人が、自分のからだや健康を意識して生活を見直し、たくましく生き抜くために、自らすすんで健康づくりに取り組む意欲と実践力を身につけられるように、取り組んでいきたいと思ひます。



則藤一起 渡辺 圭 森本孝子

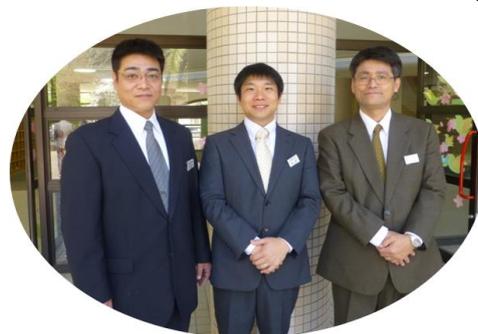
教科部★紹介

複式教育部 主体的に学び合う複式教育

～学び合いの場を生み出すみとりと支援～

学びをデザインする子を実現するために、「学び合いの場」を生み出していくためのみとりと支援のありかたについて、今年度は研究を進めていきます。

具体的には、子どもたちの司会・記録係の技能を向上させることで学び合いにおける表現力を育成したいと思います。また、単元・教材の提示の仕方をどのように工夫すれば子どもたちの学び合いがより焦点化するのかについても考えていきます。そして、複式学級の特性である「主体的な学び合い」の中で、「教師の出」はいかにあるべきかも探っていきます。



土岐哲也 中西 大 北川勝則

第13回複式授業研究会

3時間目 (10:30～11:25) 1・2F (算数) 3・4F (理科)

4時間目 (11:40～12:25) 5・6F (国語)

* 午後から、全体会・各教科協議会

◆2013年6月15(土)10時30分～16時30分

お申し込みは、web (<http://www.aes.wakayama-u.ac.jp>) または、FAX (073-436-6470 まで)



STAFF

校長	船越 勝	副校長	沖 香寿美	校内教頭	辻 伸幸
1 A	中西 正子	1 B	市川 哲哉	1 C	湯浅 明菜
2 A	小谷祐二郎	2 B	内垣 美佳	2 C	小杉 栄樹
3 A	宮脇 隼	3 B	則藤 一起	3 C	梶本 久子
4 A	西村 文成	4 B	吉久 寛朗	4 C	上田 恵
5 A	北端 一喜	5 B	居澤 結美	5 C	馬場 敦義
6 A	渡辺 圭	6 B	藤原ゆうこ	6 C	矢出 大介
1・2F	土岐 哲也	3・4F	中西 大	5・6F	北川 勝則
音楽専科	江田 司	栄 養	神山 求実	養 護	森本 孝子
講師	武友多佳子 (家庭・図書)		田村 和弘 (理科専科)		浅野万里菜 (図工・体育)
	亀岡 正志 (理科・体育)				静川 郁子 (産休)
非常勤講師	角村 会美 (養護)		糸川 良夫 (理科)		細田 知沙 (体育)
	佐原ちづよ (書写)		高瀬 優佳 (音楽)		
	大平 陽子 (図工・生活・支援)				
	Joan Onizuka (外国語活動)		Launa Karasuno (外国語活動)		

どうぞ よろしく おねがい いたします。

共同研究開発校

教科等	学 校 名	校 長	学 校 名	校 長
国 語	和歌山市立 新南小学校	桂木 道雄 校長	和歌山市立 浜宮小学校	西端 幸信 校長
	和歌山市立 高松小学校	川端 良幸 校長	和歌山市立 加太小学校	堀 優子 校長
	和歌山市立 太田小学校	岩西 啓子 校長	海 南 市 立 大野小学校	角谷 全史 校長
社 会	和歌山市立 雄湊小学校	川本 美紀 校長	和歌山市立 雑賀小学校	森田 啓子 校長
算 数	和歌山市立 砂山小学校	市川 貞蔵 校長	和歌山市立 城北小学校	梅本 優子 教頭
	岩出市立 上岩出小学校	本田 立生 校長		
理 科	和歌山市立 宮北小学校	鎌田 淳一 校長	和歌山市立 八幡台小学校	岡 正人 校長
	和歌山市立四箇郷北小学校	貴志 年秀 校長		
生 活	和歌山市立 雄湊小学校	川本 美紀 校長	和歌山市立 宮北小学校	鎌田 淳一 校長
音 楽	和歌山市立 木本小学校	尾形 兼資 校長	和歌山市立 藤戸台小学校	三木 勇次 校長
家 庭	和歌山市立 高松小学校	川端 良幸 校長	紀の川市立 池田小学校	山本 善啓 校長
体 育	和歌山市立 中之島小学校	湯川 泰成 校長	和歌山市立 野崎西小学校	小中 弘彦 校長
	和歌山市立 今福小学校	宮本 博信 校長		
図 工	和歌山市立 雄湊小学校	川本 美紀 校長	紀の川市立 池田小学校	山本 善啓 校長
複 式	田 辺 市 立 長野小学校	柳原 修 校長	田 辺 市 立 富里小学校	松本 晃一 校長
	海 南 市 立 南野上小学校	山中 幸也 校長		

From Editors

『らいぶ・創りえいた一』も13年目を迎えました。
「生き生きと本物を創り出すひと」という意味を
込めています。

本校ホームページにはカラー版を掲載しています。
ご意見・ご感想をお寄せ下されば幸いです。

編集委員：居澤、小杉、上田、則藤、中西正、田村



和歌山大学教育学部附属小学校

〒640-8137 和歌山市吹上1丁目4番1号

TEL (073) 422-6105

FAX (073) 436-6470

URL <http://www.aes.wakayama-u.ac.jp>